

青春スクロール

母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>

部活にロック音楽「おたまじゃくし」

多摩高校は進学校だが、卒業生たちは勉強よりも、いかに青春を燃焼させたかを熱く語る。自由な校風ゆえか、早い時期からロック音楽の部活動も認められた。数々の人材が巣立った「おたまじゃくし」だ。

1980年代にロックに熱中した人なら、長髪に端正な顔立ちで何台ものキーボードを自在に弾きこなす「VOW WOW」(ヴァウワウ)の厚見玲衣(56、76年卒)を覚えているだろう。解散後も忌野清志郎やRCサクセションのライブで活躍。今もステージに立つ。



多摩高校 ①



「おたまじゃくし」について思い出を語り合う厚見、風巻、沢村(左から)

3歳から小学6年までピアノを習い、フォークソングがブームだった中学時代にはギターを買った。「F」のコードを押さ

えると指が痛くなったが、逆に「コードをピアノの鍵盤に置き換えればいいんだ」と気付いたという。多摩高でおたまじゃくしに入った厚見は「先輩たちのレベルの高さに刺激を受けた。それがプロになったきっかけの一つ」と話す。

オルガンを倒しながら弾く厚見の姿に衝撃を受け、入部したのが、ギタリストでアイルランドの民族音楽で使う弦楽器、ブズーキ奏者の沢村拓(55、77年卒)。卒業後、厚見のバンドに誘われてプロになり、西城秀樹や矢沢永吉、今井美樹、中村雅

俊らのサポート・ギタリストも務めた。3年の文化祭で、後に妻となるピアニストの西山淳子(55、77年卒)の作詞で曲を作ったことは忘れられない。

おたまじゃくしを正式な部活に昇格させた功労者が、厚見や沢村の先輩で、現在は麻生高校教諭の風巻浩(58、74年卒)。「おたまじゃくしは1年の時、3年生がやっていたバンド名。多摩高を乗っ取るという意味だったと思う」。3人組バンドのベース奏者だった風巻は顧問になつてくれる先生を探し、学校から「公認」を取り付けた。

「修学旅行の服装は制服だと指定されたが、みんな抵抗して私服を実現した。『このまま

でもいいのか』と物事を一度疑ってみる考え方は、多摩高で身についた」。85、98年に母校で社会科を教えた時、おたまじゃくしに音楽家の小沢健二(46、87年卒)がいた。「高校生離れしたセンスだった」と振り返る。

おたまじゃくし出身の秦正彦(53、79年卒)は、米国の弁護士と公認会計士の資格を持つ税務コンサルタント。体育祭では応援代わりにギターでジェフ・ベックを弾いた。「米国で大切



1978. 秦 せい
同期生の漫画家、堀内夏子が描いた3年の時の秦

なのは人前で堂々とやること。高校時代はギター一色。練習しうまくなると、人前であがらなくなった。その経験がいま役立っている」と語る。

多摩高(川崎市多摩区宿河原)は1956年創立。終戦後、新制高校として市内で最初に開校した県立高で、2016年に60周年を迎える。近くを壮大な多摩川が流れ、約4万平方メートルの敷地は緑にあふれる。厚見と沢村が出演するライブ「MOON DANCER VS TACHYON」は18日午後6時から東京・高円寺HIGHで。立ち席、整理番号順の入場で、当日券は6500円。